

## 留学後の進路

白 賢 Hyun Baek  
 ニューヨーク大学歯学部補綴科大学院

## 自費か保険か、よりも大切なこと

前号で少し触れたが、日本でよく取り上げられる「自費」と「保険」による治療について述べたい。日本では、アメリカは自費診療が主で、上質な医療を提供できるから歯科医療先進国、一方で日本は公的保険制度の制約上、思いどおりの医療ができないから、医療の質・レベルも低いという認識をもたれてはいないだろうか。しかし、私はそうは考えていない。

もちろん補綴専門医課程での臨床研修を経て、私自身が今後提供していく医療の質は渡米前とは比較できないほど異なり、違う歯科医師として生まれ変わったとさえ言えるかもしれないが、一般歯科医として取り組む歯科医療のレベルに、日米でそれほど差があるとは思えない。なぜなら本来、歯科治療はやるべきことは決まっており、必要な診査診断やリスク評価、治療内容そのものに自費診療や保険診療などの区別が存在するわけではないからだ。

保険診療で許されている治療法や材料でも対処可能な治療、それで十分事足りる患者もおり、むしろ保険と自費による治療を上手に活用すれば、治療のオプションが増え、柔軟な対応が可

能になることが多いと考えている。むしろ日本の保険診療は、「仮」の治療として Questionable と診断された歯の経過をみることができる点において、アメリカの診療システムよりも威力を発揮する。アメリカの歯科医療がオール or ナッシングならば、日本の保険診療ではフィフティ・フィフティの診療が可能になる。ただし、「歯を保存する」ということは、歯科医師側がそのリスクを背負うことを意味する。したがって、注意が必要だ。

この議論の本質的な問題点は、義歯作製、歯周治療や根管治療など、内容や費やす時間、材料に対して、保険点数が適切に設定されていないことである。保険診療だからといって治療自体が急に簡単になるわけではなく、Questionable な歯を治療計画に取り入れるのだから治療はかえって難しくなり、歯科医師には慎重な姿勢、より高度な臨床スキルが求められる。さらに問題なのが、“患者の希望に添えない” “手に負えない” と判断したら、患者に「できない」とはっきり伝えるべきなのに、紹介できる歯内療法専門医や歯周病専門医、補綴専門医がおらず治療を断れないこと、この3点に尽きる。

日本に帰国？  
アメリカでライセンス取得？

さて、帰国まで残りわずかとなったこともあり、少しずつだが卒業後に向けて準備を始めている。開業は歯科医師にとって人生における一大イベントで、歯科医師としての一つのゴール、夢の実現とも言える。どんなコンセプトで、どのような患者層を対象にするかを考え、それに応じて開業場所も決めなければならない。スタッフの雇用、治療費の決定など考えなければならないことは数限りない。

ニューヨークにいる友人達に日本に戻ることを伝えると、一様に驚かれることが多いのだが、アメリカ社会や歯科界の内情、日本での私の置かれた環境をよく知る補綴科レジデントは日本に帰ることに 100%賛成だ。どちらかというかと羨ましく思われているようで、「私も日本に行きたい」「日本で開業するにはどうしたらいいんだ」と真剣に聞いてくる。日本から来たレジデントの知り合いが私一人しかいないので、私の存在が価値判断の基準になっているのだろう。日本社会を好意的に受け止めてくれていることは非常に喜ばしいことだが、ニューヨークではどちらかと言えば「Easy going」なキャ



クターとして比較的気楽に過ごしている私も、日本では私なりに意外と頑張っていることを彼らは知らない。

PGプログラム修了後の  
アメリカ歯科医師ライセンス  
取得への道

もしアメリカに残りたければ、卒後も大学に残り、Part 1 と Part 2 からなる National Board というアメリカ歯科医師国家試験を受験し、患者の協力を得て NERB（西海岸では WERB）と呼ばれる臨床実技試験にも合格し、アメリカ歯科医師ライセンスを取得する必要がある。National Board と NERB に合格し、専門医養成コースを終えるとアメリカの歯学部を卒業しなくても、アメリカ歯科医師ライセンスが取得できるという「特権」が PG 修了の専門医には付与されるが、開業場所はテキサス州など数カ所に限られたものになってしまう。また、大学によってはライセンス取得をサポートする条件で、各科の専門医をファカルティとして採用する場合もあるが、いずれにせよ数年が必要で、その間の収入は日本の卒後数年の代診と変わらない。ライセンスを取得せずにそのまま大学にファカルティとして残る道もなきにしもあらずだが、いつ解雇されるかわからない状況はリスクなので、皆は

まずライセンス取得を念頭においている。さらに、アメリカの医療保険にかかる費用は信じ難いほど高額で、衣食住等の生活環境も日本に比べて格段に良いとはお辞辞にも言えない状況なのはご存知のとおりだ。

置かれた環境と、  
自身の適性を見極めが大切

一方、私はニューヨークに滞在しつつ、現在さまざまなネットワークを頼りに日本での開業場所を探し、金融機関との交渉を進めている。帰国後はできるだけ早く開業し、診療を開始するつもりだが、渡米前に日本で一度開業経験があること、そしてその時に培った人的ネットワークは間違いなく私の強みとして効いている。外的環境はどうだろう。日本にはアメリカのような本格的な専門医養成プログラムがなく、歯科医師間のレベル差が顕著になってしまっている。また、大学によっては専門医と呼べる存在そのものが少ない、とはいえ生活費も安く街は安全で、医療費も公的な保険制度がある程度機能し、アメリカとは比較できないほど安価で質が保たれている。さて、皆さんどちらがより良いと思うだろうか。もちろん、人それぞれ人生観も置かれた環境も違うので一概には言えないが、どこに住むかは、情報インフラ

が整備された現代社会ではそれほど重要ではない。むしろ、自分自身を客観的に観察し、自身の置かれた状況を正しく認識することが大切で、自身の能力を最大限に発揮するにはどうするべきかを熟慮すべきだろう。

あくまで私見だが、アメリカが優れているのは、英語、高等教育の質、多種多様な文化や価値観をもつ人々から得られる刺激である。特に世界中から夢と希望をもった人々が吸い寄せられてくる街、ここニューヨークは何事にもとにかくチャレンジしてみようという気持ちにさせてくれる。あと 10 歳くらい若くて日本で開業したこともなく、まだまだ親も元気なら、私もアメリカに残って引き続き何かかにチャレンジしていかもれない。現時点では日本に帰ることがベストな選択だと信じているが、またアメリカにファカルティとして戻り、ティーチングやリサーチを始めることも当然選択肢の一つ、いくつになろうと、純粋にチャレンジする人間にチャンスを与えてくれる、100%公明正大とは言えないが、アメリカとは元来そういう国である。

本連載の裏話などを知りたい方は、  
 下記のブログを Check!  
<http://nyupgpros2015.blogspot.com>